

令和3年度 武生東高等学校 学校評価書

| 項目 | 具体的取組 | 成果と課題 | 改善策・向上策 |
|----------------------|--|---|---|
| 重点目標1 教育課程および学習支援 | タブレット活用で情報収集・発信・とともに主体的なポートフォリオの蓄積に取り組む | ポートフォリオ蓄積に向けた取組は、教員の約8割が意識しており、昨年度より1割近く向上しているが、生徒(特に3年生)にはその活動に取り組んだとの実感が低い。 タブレット活用も教員格差が大きく、生徒対象の学校評価・学習状況調査からも、その傾向が顕著に見られる。 | 新観点別評価のためには、タブレット活用やポートフォリオ蓄積は不可欠であることから、新1年を中心に活用が必須であることを再認識する時間を設定する。 令和3年度内に複数回の職員研修会を実施したが、令和4年度も、年度当初から全職員の意識を高めるための研修会を企画している。また、1学期末の保護者懇談前に、1年各教科の評価に関するヒアリングを実施することも検討中である。 |
| | 教科連携による授業プログラムの開発を進める | 来年度から、1年次に「情報・公共・家庭」の3教科を連携させた授業展開を新教科の学びの柱に据えることを企画した。そのための事前準備としてプロジェクトチームを発足させており、毎月テーマを決めて3教科連携授業を進める週間の設定を計画中である。 今年度は、国語と理科が連携して、「生物多様性」の授業を展開するなど、個々の授業での連携が進んでいる。 | プロジェクトチームを発展させ、3教科連携授業の企画・運営に携わるグループを設置する。 理科教育設備事業で購入予定の機器を活用した探究活動を、理科ばかりでなく保健・体育等とも連携した展開を企画していく。 |
| 重点目標2 進路支援 | 目標とすべき将来の生き方・進路を考えて進路計画を立てるとともに、その実現に向けた取組を進める | 「進路ストーリーに基づき、生徒の進路に応じた個別指導体制」に関しては、担当する教員ばかりでなく、生徒・保護者とも一定の評価をしている。特に、進路が具体化する3年生の保護者・生徒の評価は他学年より10%ほど高い。 ただし、2年生は前年比10%程度の低い保護者評価となっている。このことは、「本校に入学して良かったか」との問いに対して、2年生生徒および保護者の評価が低いこととの関連があると思われる。 | 現在、改善の必要性がある2年生ではあるが、最上級生となり、探究活動等も進路希望実現に向けた活動にシフトするため、徐々に進路意識に関する評価は改善すると期待している。また、学年教員団も、進路指導に特化した体制に構築していくことで改善に繋げていく予定である。 新1年生は、新学科が稼働し、2年次からの3コースへの選択をするための時間が必須となるため、必然的に進路を考える時間は多くなっていくと思われる。 |
| | 自己の適性を理解し、興味関心ある分野の探究を深める意識を醸成する | 「大学の先生や外部指導者等からの助言や支援をうけ、主体的に探究活動」に関して1・2年の生徒中心に高い評価を得ている。Hino・Questでの探究活動での影響だろう。 その一方で、この評価が教職員のアンケート結果では高くなっていないことは若干驚きである。Hino・Questでの個人研究テーマ(1年)、グループ探究テーマ(2年)の設定をすすめる過程で、指導にあたる教員間の温度差が課題の1つに上げられているが、関係性があるのかもしれない。 | 新学科では、理数探究基礎という教科になり、今までの探究活動以上に、多角的・複合的に事象を捉え、課題に向き合うことにフォーカスしたプログラムも準備していく。また、3教科連携授業企画グループとの連携強化も進めていきたい。 新年度の「地域の普通科系高校魅力向上支援事業」で購入予定の理化学機器を活用し、サイエンス、ヘルスケアの視点からの探究活動を充実させていく。 地元大学との連携を強化し、ONLINE教室を活用して、大学教授陣からの支援を受ける活動も展開予定である。 |
| 重点目標3 生徒支援 | 生徒自らが、校則を含めた現状の問題点を分析・思考・判断し、仲間と協働して改善していく | 「本校の生活指導は、マナーや社会のルールについての意識させるものになっている」との生徒評価が、1・3年で8割を超えるが、2年では10%以上低い結果が出ている。昨年は全学年平均して8割程度あっただけに、2年生の評価の低さが気になる場所である。 仲間と協働して改善していくとの視点に関して | 教員には、前年同様に共通理解の上で、主体的活動を推進・支援していく意識があるが、生徒がその思いを実感できていないことが鮮明になった。これを、「コロナ禍のため」と単純な分析で終えず、その分析のための協議の場を持っていきたい。 「生徒会活動への取組」の意識の低下、特 |

| | | | |
|-------------------------------------|--|--|--|
| | | <p>は、生徒評価が5割未満であるのに対して、教員は約8割が満足していることから、大きなギャップがある。育てたい資質能力の1つである「主体性」に関して、教員が100%意識したと感じている反面、生徒はその向上を自覚している割合が低く出ていることとも関連があるのかもしれない。</p> <p>生徒会活動への取組への生徒の満足度が、昨年に比べて学年全体で10%も低下していることも大きな課題である。</p> | <p>に学校評価実施時期(12月)に主体となって生徒会活動に取り組むべき学年での最も評価が低いことは、改善すべきポイントやターゲットを明確化するためにはわかりやすい結果であった。</p> <p>「進路指導」、「本校への満足度」等の評価結果もふまえて、包括的に生徒の想いを汲み取った活動の支援に取り組んでいきたい。</p> |
| <p>LHや行事等を通し、自助共助の意識を教員・生徒共に高める</p> | | <p>「自然災害や防災についての基礎的・基本的知識の理解と自助共助の意識構築」に関する評価が、保護者や教員よりも、生徒に高い評価を得ている。(生徒85%、教員82%、保護者64%)</p> <p>新しい避難訓練、PBL形式での防災教育の実施や、生徒手帳に収納できるポケット避難マニュアルの配付に一定の評価が得られたと思われる。</p> <p>昨年までは、年間2回定期的に実施していた学校安全委員会を、1学期だけで4回実施して、教職員の防災対策に関する理解に繋げるとともに、夏場の熱中症対策の教員研修会実施により、部活動指導での教員の立ち位置や他部との連携強化に関する意識を高めることができたことも成果の1つである。</p> <p>地域・保護者からの度重なる苦情やトラブルをふまえ、登校時の自家用車送迎ルールを大改革した。この改革後は、大きなトラブル・苦情が皆無であり、生徒自身が交通安全に対する意識を高めていることがわかる。</p> | <p>「大川小の悲劇から10年・池田小事件から20年」という節目であったこともあり、危機管理マニュアルの改訂と新たな活動を実践してきたが、この取組を一過性のものとせず継続して実施できるかが鍵になる。</p> <p>教員の中では、多忙感を感じている割合が極めて高く(多忙感改善を実感している割合3割未満)、今回の学校安全の新たな取り組みを、「業務負担増」と捉える向きもある。業務改善を進めていくことの重要性和学校の安全性を高めていくことは、次元が異なることともいえるが、これらの声をしっかりと受け止めて、より負担感無く学校安全につながる方策や外部資源の活用策を検討していくことが必要である。</p> |
| <p>重点目標4 グローバル・SDGs</p> | <p>SDGsの17目標と169ターゲットを調べ、自分の探究活動の中にSDGsの視点も取り入れる</p> | <p>2021.3月に「ふくいSDGsパートナー」に登録し、探究活動を中心とした授業でのSDGsの意識付けを図っている。ただし、これらの活動が1・2年生中心であることから、担当する教職員のみに評価が限定されてしまった。</p> <p>生徒からは全体で89%の評価を得ており、特に外部講師によるSDGsゲーム等で理解を深めた1年生は95%超であった。生徒に対しては、持続可能社会づくりのために何をすすめるべきかという意識を高めることはできているように見える。</p> | <p>教科間連携による授業内でのSDGsへの意識醸成は、3教科連携授業等も活用して実施することになる。</p> <p>今後は、自主教材を作成しての授業展開を計画している教科の教材の1つとして活用することも進めていきたい。</p> |
| | <p>英語セミナー・国際会議等の学校行事を通して、異文化交流活動を推進する</p> | <p>コロナ禍の中で、満足いく異文化交流ができなかったが、ONLINE交流ルームを有効に活用し、オーストラリア、ニュージーランド姉妹校をはじめ様々な海外との交流活動を実施した。また、9月に実施した国際会議(WHF)は、9カ国199名の参加者を集めて充実した時を過ごすことができた。これらの活動により、異文化交流に関する取組に関しては、1・2年で評価が高く、特に国際科に関しては保護者にも認知されているようである。</p> <p>国際会議(WHF)に関しても高い評価を得ている。ただし、「WHFに参加されたお子様の保護者のかたのみお答えください」との問いに対し、1年生の参加者はゼロであるにもかかわらず1年保護者10名が回答、2名の生徒しか参加がなかった3年普通科保護者からは23名の回答が得られた。このような入力ミスが発生することの無いようにアンケート方法に工夫が必要である。</p> | <p>R4には空き教室を活用してONLINE講義受講専用教室を設置する。この新教室とONLINE交流ルームを有効活用した授業等を展開していく。</p> <p>国際会議は、第1回大会の反省点を活かしまた、環境の変化も想定してONLINEと現地集合を融合したハイブリッド型での運営を企画している。</p> |

| | | | |
|-----------------|--------------------------------------|---|--|
| 重点目標⑤ 外部との連携 | 年間の各種教育活動内容が伝わるようなわかりやすいHPでの情報発信に努める | <p>昨年度新規作成した学校HPが順調に機能し、常に最新の活動を配信してきた。目標としていたHP更新回数100回も年度半ばに達成し、積極的な情報発信に関する実感は、教員評価は20%以上アップとの結果にも表れている。</p> <p>新学科設立に向けて、専用ページの設定作業は遅れているものの、TOPページを活用した新学科内容の周知は、極めてスムーズにおこなうことができた。</p> <p>秋から中学各教室掲示用の紙ベースでの情報発信を開始した。ターゲットを中学校の生徒に絞り、部活動や日常生活で楽しいことを中心に伝えられるように紙面を工夫している。</p> | <p>HPは、主担当・副担当と役割が明確になっておりそれぞれ責任感を持って業務にあたっていた結果が、更新回数の目標達成につながった。しかし、中学教室掲示用の学校通信については、年度途中からの活動で一部の教員の業務負担増の可能性があったため進展しづらい状況であった。R4は、担当分掌を明確に位置付け、年度初めの業務分担段階で、バランス考えた上での担当者設定をおこなう。</p> <p>R3の校務分掌再編に伴い、学校紹介リーフレット、ポスター作成をはじめ学校説明会までの担当分掌を1つにまとめることができたため、スムーズな広報活動が実施できた。R4は、事前に中学側と日程調整を済ませた学校説明会を7月に計画するなど、参加者側に最大限の配慮をした広報活動が実践できるようにしていきたい。</p> |
| | Hino・Quest(総合的探究)において世代を超えた交流の場を増加する | <p>主体的な探究活動への取組や、外部からの助言・支援を受けて視野を広げる活動に関しては、1・2年生の9割以上の評価がある。</p> <p>世代の枠を超えた交流の促進に関しては、コロナ禍の中で、他校・他大学との交流がONLINEに限定されるなどの影響があったものの、例年以上に参加者があった。</p> <p>特に、国際会議(WHF)に関しては、9ヵ国199名と、当初予定の2倍を超える参加者が集まり、グローバルな視点で、それぞれの国々の高校生が課題解決に関して協議することができた。</p> | <p>新学科となる1年生は、2年からのコース選択と、そのコース内で深めていく課題解決に向け、多角的・複合的に事象を捉えるまなびを充実させることになる。グループでの課題解決策実践につながる2年生での取組は、3年目を迎え、数々の修正点を加えていく。</p> <p>県内他校との意見交換の場を、複数回設定し、自分自身の活動の省察と今後の展望を考える時間を設けることも検討している。</p> |